

# 幼児の人間関係と協同的活動

原子 純（岩手県立大学）

幼児は遊びの中で能動的に対象に関わり、自己を表出する。そこから外の世界に対する好奇心が生まれ、探索し、物事について思考する。また、人やものとの関わりにおける自己表出を通して自我を形成するとともに、自分を取り巻く社会への感覚を養われ、子どもの人格形成にもつながると考えられる。

本研究では、保育者を対象に子どもの主体的な活動について調査を行い、子どもの人間関係と協同的活動をどのように意図して、保育の援助を実践しているかを明確にする。

**キーワード** : 就学前教育 人間関係 協同的活動 保育援助 試行錯誤

## 1 はじめに

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（以下「教育・保育要領」）においては、「園児の自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも必要である。それは、遊びにおいて園児の主体的な力が発揮され、生きる力の基礎ともいべき生きる喜びを味わうことが大切だからである。園児は遊びの中で能動的に対象に関わり、自己を表出する。そこから外の世界に対する好奇心が生まれ、探索し、物事について思考し、知識を蓄えるための基礎が形成される。また、人やものとの関わりにおける自己表出を通して自我を形成するとともに、自分を取り巻く社会への感覚を養う」と子どもの主体的な力が発揮されるような遊びの確保が子どもの人格形成にもつながる重要な役割だと述べている。

## 2 乳幼児期の「自己」「関係」

山本(2017)は、子どもの主体性・主体的・主体の概念の記述で表現されている要素のタイプ分けを行った。山本は、主体性・主体的・主体の概念は大きく「自己」「関係」「その他」の3つに分類されるとし、「自己」は自己の存

在、自発的な行動や態度に関する概念、「関係」はモノや人とのかかわり、「その他」は発達の視点であると述べている。この結果から子どもの主体性の概念は「自己」と「関係」の両面の意味で示されており、保育者は一方の視点のみを捉えた保育ではなく、両面を捉えなければならないと示唆した。その上で、つまり保育者は子どもの『自己』を中心とした主体性、『関係』を中心とした主体性、両方のバランスが保たれている場合、それぞれが移行しバランスが変化する場合等、子どもの姿の変化を見通さなければならない。主体性を捉える保育者実践では、これらの点を踏まえて、子どもの姿に応じた指導や援助の多様性、応答し合うような保育者の姿勢が求められていると言えようと述べている。

## 3 保育の援助・実践における「自己」「関係」

幼保連携型認定こども園の保育教諭を対象とした調査の結果、以下のことが分かった。

保育におけるクラス活動時で一番「自己」「関係」が育つと思われる年齢を質問した。なお、下記の「その他」とは「〇歳児～〇歳児」というような複数回答である。

その結果は、「0歳児」「1歳児」「2歳児」が0人(0.0%)、「3歳児」が1人(3.6%)、「4歳児」が2人(7.1%)、「5歳児」が14人(50.0%)、「その他」が6人(21.4%)、「無記名」が5人(17.9%)であった。クラス活動時で一番回答の多かった「5歳児」の理由としては、「自分たちで進めようとする姿が見られるため」や「みんなと一緒に取り組む楽しさを感じられる」などが挙げられた(表1)。

表1 クラス活動時(5歳児)

「自己」「関係」が育つ理由

クラス活動時(理由)
自分たちで進めようとする姿が見られるため
子どもたち同士で話し合うことが出来る
自分の思いや考えを言葉で伝えることが出来る
自分なりに考え動くことが出来る
クラス意識が育まれる
みんなと一緒に取り組む楽しさを感じられる

#### 4 認定こども園における遊び場面における人間関係と協働的活動

上記と同様に、幼保連携型認定こども園の保育教諭を対象とした調査の結果、以下のことが分かった。

保育における好きな遊び時で一番「自己」「関係」が育つと思われる年齢を質問した。なお、下記の「その他」とは「〇歳児～〇歳児」というような複数回答である。

その結果、「0歳児」「1歳児」「無記名」がともに0人(0.0%)、「2歳児」「3歳児」がともに3人(10.7%)、「4歳児」が6人(21.4%)、「5歳児」が9人(32.1%)、「その他」が7人(25.0%)であった。好きな遊び時で一番回答の多かった「5歳児」の理由としては、「自分のしたい遊びのイメージが明確になる」や「自分たちで遊びの幅を広げることが出来る」などが挙げられた(表2)。

表2 好きな遊び時(5歳児)

「自己」「関係」が育つ理由

好きな遊び時(理由)
相手の思いに気づけるようになる
自分のしたい遊びのイメージが明確になる
自分からやりたい遊びへ向かう姿が出てくる
自分たちで遊びの幅を広げることが出来る
他児と関わりを持ちながら遊ぶ
様々な経験をもとに遊びを展開するから

#### 5 まとめと今後の課題

保育の援助・実践における「自己」「関係」について、自由記述での内容では、「子どもの気持ちを受け止める」(表3-1)と「信頼関係」(表3-2)が多かった。幼児の人間関係には、保育者(ここでは保育教諭)との「関係」が構築されていることが伺える。

表3 子どもの「自己」「関係」を育む

保育者の姿に関する自由記述

##### (1) 子どもの気持ちを受け止める

子どもの存在を認め、楽しんでいる姿、様子に寄り添っていく。共に生活する者としてモデルとなりつつ子を支えていく。
子どもたちの主体性を育むために遊びや活動の際に褒めたり、認めたりすることで自信をつけて自分から考え行動していけるようになるのではないかと思います。
「意欲」や「やってみたい気持ち」、「自分で決めたこと」をしっかり受け止め、認め、そこに向かって頑張っている姿を認め、時にはモデルとなって子どもたちに示していく。
子どもの主体性を育むためには、クラスの中で安心できるような関わりをし、その子なりの考え(発言など)を受け止め、思いをどンドン引き出すような関わりが必要だと思われる。

##### (2) 信頼関係

自ら真似たり、自然にやってみたり、やってみようという意欲が出てきたりと、年齢、個々によって違いはありますが、すぐに手を出してしまったり、ことばをはさむのではなく、ヒントを与えてあげたり、遊びを見守ったり、失敗も大切にしながらかつなげていけるような援助をするなど、あるかと思えます。まずは子どもとの信頼関係。
主体的に活動するためには保育者との信頼関係や心身の安定が基礎となるため、日々の信頼関係の構築も大切にする。

これらのことから、援助・実践における「自己」「関係」のあり方として、子どもたちが自分たちで活動が出来るような関わりが重要だということが考えられる。保育教諭への聞き取りでは、[子どもたちがアイディアを出せるような関わり]、[子どもたちが自分たちで話合う時間を作る]、[子どもたちで決められるように言葉を補う]、[子どもの様子から保育者の関わりを加減する]が挙げられた。この子どもたちが自分たちで活動できることこそが、幼児の人間関係と協働的活動と考える。さらに、子どもの発達から見た「自己」「関係」の形成は、多くの保育教諭がクラス活動や好きな遊び時での5歳児と回答した。それは、5歳児が様々な経験を積み重ね、自分の遊びたいものを明確に持ちながらも協働的活動が見られる場面が多いからなのではないかと考える。

なお、本研究は保育教諭への聞き取りを中心としており、対象が限られているという限界を有している。